

その間、グラマンを機銃掃射するから、どこの家でも防空壕を掘っていました。私は焼夷弾でやられた人を救護し、学校の救護所へ運びました。

戦地の兵隊は自分で戦えるが、一般市民は武器もなく、逃げ遅れた人は爆死しました。神戸の三宮の溝という溝に死体が、子供を背負っている母親もいました。戦場も大変だが、戦地で被害を受けなかった人もいます。私は内地で軍需工場にいたから、空襲で九死に一生を得ました。死んだ人は犬死にだったのか。

戦友会で、話を聞くのですが、苦労した人もいますし、楽だった人もいます。内地の空襲の苦しみもある。戦地で残した、死ぬ人を置き去りにしたことを、未だに悔やんでいる人もいます。

私の家の近所は皆焼けましたが、不発で助かった家もあります。近所では十何軒もやられたのですが、二、三軒は残りしました。畑の中にあつた家でも焼けた人もいます。

私は昭和十二年阪神の水害と大きな事故に遭つた。そして軍隊へ行き、生きて帰り、内地帰還後空襲にも

遭つたが助かつた。さらに、平成七年一月の阪神・淡路地震の時に焼け、妻は家の下敷きになり、未だに病院へ通つています。私は軍隊で粘り強い負けじ魂で強くなつたと思います。人生は悪い面ばかりではない。戦犯のみが悪いのではなく、A級戦犯は気の毒であると思います。

災害はいつ、どこで起こるかには分からない。悪いこととは何でも、他の人のせいにするのは良くない。自分も責められることもある。私は軍隊での負けじ魂、戦友愛、困難に勝つ粘り強さこそ、私の人生を救つてくれたと今でも思っています。

三回の召集に生き残り

八十七歳でも青年

秋田県 佐々木 隆治郎

私は大正二（一九一三）年十二月十七日農家に生まれたのですが、明治末期から大正時代に入って三代目

私の家庭が始まったのです。私の上に姉が一人で次は私でした。その後、三年に一人ずつ生れて、女三人、男六人の九人の兄弟姉妹となりました。

貧しい暮らしではあったが両親がよく頑張ってくれて、兄弟は皆尋常高等小学校の高等科を卒業させてもらいました。当時の農家の生活は、高等小学校はもちろんのこと、義務教育の尋常小学校も卒業できず、丁稚奉公や、地主の家で作男として手伝いのようなことをして、生計の足しにしなければならぬ友人もおりました。

私は、外観は小さいけれども頑健な方でしたので、高等小学校を卒業すると、家で親の手伝いをしたし、働いた金はすべて親に渡し、一銭も使いませんでしたし、下の弟妹の面倒を見て育ったので、兄弟姉妹がお互いに思いやりがあり、それが我が家の家庭教育であつたと思います。

私が兵隊検査を受ける昭和八（一九三三）年頃は軍縮時代で、検査結果は身長・体重の関係か第二乙種でした。それで、私は、甲種合格者ばかりが兵隊になれ

るけれど、私は兵隊の味いはできぬと思つていました。しかし、昭和十二年には支那事変が勃発し段々と戦時色というか、非常時となり、昭和十五年三月一日、「第八師団の野砲兵第八連隊に入隊せよ」という召集令状が来しました。我々の同年次の者は早くも現役として入隊し戦地へ行った者も多かつたのです。

ところが、昭和十四年には、ノモンハン事件があつた翌年でしたが、同年入隊の現役兵は、大正九年生れでした。当時、私は既に結婚していましたが、妻は妊娠中でしたが、その子供は私が出征中に生れましたが死んでしまいました。私は、「祝 出征」の旗を立てた人々の「勝つて来るぞと勇ましく」の歌に送られて、まさに勇ましく大曲駅を出発し弘前の野砲兵第八連隊に入隊したのでした。

次の日から、軍人精神を植え込むということで、やたらに厳しい軍隊生活が始まりました。私は、五反百姓と言われる貧農の家に生れ、馬を使った馬耕という農具を使って耕起し、碎土をしてから、田んぼに土を

入れ、万鋤という農具で田をかきならしをする。田かきが終われば型を付けて、田植えは人を頼んで、苗取りから、苗運び、植方と、実に忙しい一日でした。

田植えが終われば、馬を休めておかず、大曲の各間屋から小売の商店に品物を運んで駄賃を稼ぐという運送業もして家計を助けておりました。そのようなことで、野砲兵隊には馬が多いから、砲を引く輓馬の訓練、馱兵の訓練が始まったが、体格の良い馬を慣らすのは、素人にはできぬのだが、私は日頃、馬を扱うのは本職であるから、六頭の馬を馱す初年兵は少ないから、体格の劣った、第二乙の私はすぐに六頭馱者として一人前になりました。芸が身を助けるというか、日頃の慣れた仕事が、軍隊の初年兵教育に役だったというわけです。

しかし、盛岡の三月と言えばまだ寒い季節です。起床ラッパで起き、直ちに馬屋に行き、自分の馬を引き出して水飼いし、それから兵馬の訓練となる。素人では一頭の馬を扱うのに苦労するのに、自分の馬の他も含めて六頭立てて慣らすのだから大変でした。入隊後

は生活が一変し、それに寒さが加わったため風邪を引き、高熱を出して苦しんで、軍医殿の診察を受けたら、肺炎と診断されすぐ入院となりました。軍隊という所は、一日早く入隊しても「古兵様」であるから、その後、現役兵と召集兵が入って来た。教育召集兵もしていた人も多くありました。

私は入院後、順調に快方に向かい、元気を取り戻すため転地療養となり、碓ヶ関の温泉場に送られ療養していました。ところが、一緒に入隊した仲間は三カ月で召集解除となって帰ってしまいました。私はその後、入隊して来た新しい兵隊と一緒に軍人としての訓練を受けて三カ月間で召集解除となったのですから、合計六カ月の実績を残して家に帰ったことになりました。

帰って農耕に従事していた昭和十六年七月十七日、二度目の召集令状が来て、弘前の北部第二十部隊に入隊しました。部隊はやはり、前と同じ野砲連隊でした。入隊して半月も経過せぬ昭和十六年八月二日、満

州第一〇二部隊要員として弘前出發、八月十一日、関東州界を通過、八月十四日、満州牡丹江省綏西着、満州第四六六部隊に入隊しました。その部隊は、青森・岩手・秋田・山形・福島等の東北の兵隊が多かった。

ここで二カ年、夏は暑く、冬は極寒の気候の中で、毎日あらゆる訓練を受けましたが、その目的は満蒙警備、実戦に則した様々の訓練でした。戦闘時、空襲時、馭者として、馬を安全な所へ速やかに誘導、遮蔽、避難させる。対ソ国境警備、ソ連来攻に備えての兵力増強等々あらゆる訓練が二年間敵寒の中で行われました。しかし、幸いにして凍傷にはなりませんでした。それは、故郷で毎年寒さの中で生活をしてきたためでしょう。

ところが、その国境警備中の昭和十八年七月十一日、留守業務担任部隊帰還の命令を受け、突然内地向け、綏西出發となりました。私は夢ではないかと、頬をつねってみたが夢ではありませんでした。仲間に「なぜ、佐々木だけ帰るのか」と言われていましたが、その原因は、前に申した、初召集の時の入院期間を含

め六カ月のため（他より三カ月多い）だと分かりました。病気をしたお陰で帰れたのですから、軍隊はまことに運隊であり、同年兵達の羨む中、「七月十二日、鮮満国境通過、七月十六日、釜山港出帆、十七日、下関上陸、十九日、弘前到着、同日、北部第二十部隊に転属、七月二十五日、陸軍兵長に進級、七月二十八日、召集解除」と軍隊手帳に記入されています。

家に帰り、両親は健在であったし、家族は夢ではないかと、また親戚や友人や近所の人々は、多くの人が召集されていくのに、まさかと喜んでくれました。

私が出征する時は、大東亜戦の始まる前であり、開戦後は、連戦・連勝、連合国を相手に押していたのですが、私が帰った頃は南方も押され気味となっていました。

内地の様相もだいぶ変わっていて、物資は少なくなり、米の供出も厳しく、自家用の物も少ない。米作りの農家でさえ主食は少なくなり、燃料は薪一辺倒、また、薪も供出しなければならず（重量でなく束で供

出)、衣料も不足してしまいました。

そのため、疎開の人と衣料の交換や、岩手などから米を買いに来た人と海産物(昆布・若布・魚)を交換した。農家は米の収量を落さぬよう指導されるから、収量の多い品種(味よりも量)を作るようにしていた。闇米は供出米より随分高い値で取引されているのに驚いていました。

私は家に帰ってから再婚しましたが、軍隊へ行っていたため子供は遅かった。長男が昭和二十年、次男が二十三年生れです。私が召集解除になった昭和二十年、太平洋戦争も敗色がはつきり見えた来た時であり、第一線で活躍していた各部隊も、銃後の国民の苦しみもその極に達してしまいました。

そんな時、私は弘前の野砲兵第八連隊留守隊に三回目の召集でした。しかし、その時の仲間の多くは部隊編成ができて南方へ行く途中で輸送船が沈められ死んでいます。ですから、召集された時期により生死が分かれたわけです。

私は、部隊の重要な製材機械を取り付けるという任

務があったので原隊に残されました。部隊では、丸太から必要な角材・板材を作っていて、その材料で部隊の弾薬箱その他に使っていたのです。結局私は入隊前の地方での技術や体験が認められたわけで、世間で言う「芸が身を助けた」というわけでした。

ところが、八月十五日、留守隊全員が追馬場へ集合を命ぜられました。そこで天皇陛下の玉音放送を聞きました。その瞬間、私の脳裏に苦難がひらめきました。負けたということ、国の行く末、国民の苦しみ、我が家の苦難、家には両親と、三女の妹と六男の弟が居ました。二男は「弾部隊」で中国で中支へ、四男の弟は「雪部隊」で西部ニューギニアに、五男の弟は北海道の千歳航空基地で勤務していました。その時は、それぞれの部隊がどこに居て、どのような任務についているのかもろん分かりませんでした。

しかし、私は、第三人の帰還を心配していました。が、私自身、いかなる艱難も、いかなる茨の道も、体力・気力で切り開こうと固い覚悟を決めていました。

ですから、昭和二十年八月十五日は、私の人生にとって最大の苦難の日でした。家には両親と三女の妹と六男の弟が残っておりましてので、心強いものがありませんでした。

その後、四男の弟と同じ雪部隊で、西部ニューギニアで戦っていた戦友が帰ってきたので、弟の消息を聞いたところ、戦友も言いにくかったようですが、気の毒そうに「戦死しました」ということでした。同郷の自分が生きて帰って来たのに、佐々木君は死んだとは、気の毒に思ったのでしょう。言いにくいことを我々家族に言いました。現地では食糧もなく、草を食べたりして命を永らえなければならなかったそうです。

五男は、海軍航空兵として志願をして北海道千歳基地にいて心配だったのですが大丈夫で生き残っていました。両親は丈夫であったから我が家は、まあまあ良かったのですが、一人でも戦死ということは両親にとっては、悲しい思いをしたことでした。二人の妹は結婚していて一応安心した状況でした。

私は、農業と燃料の販売をしていましたが、当時の燃料は薪が主力で、後に石炭に代わってきましたが、その後灯油もポツポツと使用するようになり、私は地下タンクを作って貯蔵していました。その仕事を続けたが燃料が変化して、灯油を燃料として使っていました。

今は子供夫婦が仕事を継いでいます。私は老人会に入って、老人問題に取り組んでいます。現在は老人クラブへの入会が少なくなっていて、七十人ほどしか居ません。私は老人クラブでは過去の話をしています。後輩の人達に幾分でも役に立ちたいと思います。現在、八十七歳ですが、皆は七十歳台と見られています。人生百年を目標に、折角の生き残りの人生です。